# 西洋哲學講義

井上哲次郎講述

卷一

心理
號數 三
部門 一
冊數 六
發賣
縣市
學校

五号

130
245
Vol 1

井上哲次郎講述

# 西洋哲學講義

明治十六年四月廿七日版權免許

彦根藩立宗教研究所

## 緒言

方今文運隆盛、各專門ノ學大ニ興ル、然レ𪜈獨リ哲學ヲ講ズルモノニ至テハ寥々聞ユルナシ、夫レ泰西文明ノ原因固ヨリ數フベカラズト雖モ、然レ𪜈希臘以來ノ哲學者ガ人心ヲ啓發シタルノ効、實ニ淺尠ナラザルヲ覺ユ、余是ヲ以テ頃ロ門生ノ爲メニ、シユウェグレルリユウヰスユーベルウェグ諸氏ノ哲學史ニ據テ西洋哲學ノ概畧ヲ講述シ、以テ東洋哲學ヲ興サンコトヲ企圖スレ𪜈、遠地ノ人幷ニ他ノ事業ヲナス人ハ與リ聞クヲ得

ス、故ニ既ニ講述セシ所ノ旨意ヲ略記シ、以テ世ニ公ニス、看官若シ余ガ微衷ノ存スル所ヲ諒察セバ幸甚、

明治十六年六月十七日　著者　識

# 西洋哲學講義目次

巻之一


第一回
總論

第二回
哲學史ノ區分

第一期
テールス氏及ビ其學徒

第三回
ピサゴラス學派

エリア學派
第四回
ヘラクリトス氏
エムペドクリース氏
第五回
原子論者
アナキサゴラス氏

# 西洋哲學講義卷之一

井上哲次郎　講述

## 第一回

### 總論

第一節　今予レ諸君ニ向テ西洋哲學ノ講義ヲ始メントスルニ當リ、先ヅ哲學トハ抑、如何ナル學ナルヤヲ略論セザルヲ得ズ、何ントナレバ、哲學ノ我邦ニ入ルヿ、日猶ホ淺キヲ以テ、諸君ノ中未ダ哲學ノ何タルカヲ知ラザル人モアルベケレバナリ、然レ𪜈西洋ニテモ哲學ノ解ニ就キテ

ハ異說多クシテ、今ニ至リテ未ダ決セザルヿナレバ、哲學ノ意ハ斯樣々々ナリト云フヿ甚ダ容易ナラズ、抑哲學ハ泰西ニイハユル「フヒロソフヒ」ナリ、此「フヒロソフヒー」ナル語ハ原ト智識ヲ愛スルノ義ニシテ、希臘ノ名賢ピサゴラス氏ノ創稱スル所ニ係ル、然レドモ後世ノ哲學家此語ヲ襲用シ、各其見ル所ニ從テ種々ノ定義ヲ下ダセリ、カント氏ハ之ヲ人間ノ道理ニ屬スル必然ナル目途ニ衆智識ノ關係スルヲ講ズルノ學トシ、ヘーゲル氏ハ之ヲ辯證式ニ由リテ絶對（アブソリユート）ヲ論究スルノ學トシ、又自ラ覺知スル理性ノ學トス、スペンセル氏ハ之ヲ全ク統合シ得タル學トシ、又最モ總體ニ關スルノ學トシ、フエリエル氏ハ之ヲ推理ニ由リテ眞理ニ達スルノ學トシ、リユイス氏ハ之ヲ宇宙并ニ人類ノ命數ヲ解釋スルノ學トス、其他或ハ諸主義ヲ論究スルノ學トシ、或ハ諸學ヲ總括スルノ學トスル者アリ、然レドモ之ヲ要スルニ、哲學ハ諸科學ノ資給スル材料ヲ統合シ、以テ天地ノ流行スル間ニ自ラ變化セザル者アルヲ尋究スルノ學ナリ、即チ萬化

ノ由リテ起ル本源ヲ詳査スルノ學ナリ、此ノ如ク廣ク總體ニ係ル哲學ヲ純正哲學（ピューアフロソフヒー）ト云フ、而シテ一事一物ニ就キ哲學ノ法ニ由リテ眞理ヲ究ムルノ學モ、亦皆哲學ニ屬ス、心理倫理論理等ノ諸學是レナリ、近來英國抔ニテ單ニ哲學ト云フモノハ大抵此等ノ諸學ト純正哲學トヲ總稱スルニ似タリ、

第二節　哲學ニ又二種アリ、其一ヲ實驗哲學（エムピリカルフヒロソフヒー）ト云フ、即チ實物ニ徴スルヲ以テ主トスルモノナリ、其一ヲ形而上學（メタフヒジック）或ハメタエムピリカルフヒロソフヒー）ト云フ、即チ論法ニ由ルヲ主トスルモノナリ、蓋シ古代ノ哲學ハ大抵形而上學ニ屬ス、而シテ實驗哲學ハ近代英ノベーコン氏之ヲ主唱セシニ由リテ興レリ、即チロック及ビスペンセルベイン等ノ諸氏ハ皆此學派ノ人ナリ、之ニ反シテ獨逸ノカントフヒヒテセリングヘーゲル等ノ諸氏ハ皆デカルト氏ノ學風ヲ傳フ、即チ形而上學派ノ人ナリ、之ヲ概スルニ、獨逸ノ哲學多クハ形而上ヨリ形而下ニ及ボシ、英ノ哲學ハ形而下ヨリ

形而上ニ及ボスノ傾向アリ、故ニ英ノ哲學ハ實著ナリト雖モ、卑近ニ流レ易ク、獨逸ノ哲學ハ高妙ナリト雖モ、空漠ニ過ギ易シ、而シテ英ノ哲學ハスペンセル氏ニ至リテ極リ、獨逸ノ哲學ハヘーゲル氏ニ至リテ極レリ、是ヲ以テ此二氏ノ哲學最モ相反セリト謂フベシ、後來若シ二氏ノ哲學ヲ折衷シテ之レガ大成ヲ企謀スル者アラバ、其レ必ズ正當ノ哲學ヲ得ンカ、或ハ又哲學ヲ想考哲學（セオレチカル、フヒロソフヒー）及ビ實踐哲學（プラクチカル、フヒロソフヒー）ノ二種ニ分ツモノアリ、或ハ又土地ニ隨テ東洋哲學（オリエンタル、フヒロソフヒー）及ビ西洋哲學（オクシデンタル、フヒロソフヒー）ノ二種ニ分ツヲ得、其他哲學ヲ分類スルノ法種々アレ𪜈、今一々之ヲ論ゼズ、

第三節　前節中ニ形而上學ト稱スルモノモ、其實ハ古來一定ノ意義アルニアラズ、或ハ純正哲學ト殆ンド其意ヲ同ウスルヿアリ、夫ノ獨逸ノ哲學者ヲモ高上學派ト云フハ、唯其論法ヲ尚デ實驗ヲ尚ブサルヲ以テノ故ノミ、然レ𪜈猶ホ委

シク之ヲ云ヘバ、縱使ヒ實驗ヲ尚ブモ苟モ推理スル以上ハ、之ヲ形而上ノ事トセザルヲ得ズ、且ツ如何ニ論法ヲ尚ブ者ト雖モ、全ク實驗ヲ採ラザルニアラザルベシ、然レバ兩學ノ間固ヨリ判然タル區分アルニアラズ、但其主トスル所ニヨリテ便宜ノ爲メニ之ヲ分ツノミ、蓋シ形而上學ハアリストートル氏ニ始マル、氏ハ其自ラ著セル形而上學中ニ總テ原因ヲ論ゼリ、而シテ原因ヲ論スルヲ以テ第一哲學トシ、專ラ變化多キ萬象中ニ就テ永世存在シテ、得テ見ルベカラザル眞實體ヲ尋究スルヲ主トセリ、然レバ形而上學ハイハユル實體學（オントロヂー）ト異カラズ、然レモ又形而上學ヲ實體學及ビ靈魂學（ニユマトロヂー）ニ分チ、實體學ヲ以テ形而上學ノ一部分トスル者、古來往々コレアリ、ウルフ氏モ亦之ヲ四部ニ分ツ、而シテ實體學其一ニ居ル、スチュワート氏ノ如キハ之ヲ人心ノ歸納哲學（インダクチヴ、フヒロソフヒー）トス、乃チ形而上學ナル語ハ一定ノ意義ヲ有セザルヲ知ルベシ、然レモ姑ク之ヲ思辨ヲ主トスルノ哲學ト解シテ可ナリ、

第四節　心理學（サイコロヂー）ハ哲學ニ最モ親密ナル關係ヲ有シ、全ク相分ツベカラザルナリ、實ニ心理學ハ哲學ノ根基ナリト謂フベシ、唯、心理學ト云ヘバ、其範圍哲學ヨリ狹クシテ、全ク心意ノ諸現象ヲ論ズルノ學ナリ、而シテ哲學ハ廣ク萬物ニモ論及スルモノト知ルベシ、然レドモ如何ナル事ヲ論究スルモ、心意之レガ本トナルナレバ諸學ヲ統合スル哲學ニアリテハ、殊ニ心理上ノ考査ヲ必要ナリトス、ハミルトン氏曰ク、哲學ハ心意ヲ以テ其論ズル所ノ第一ノ題目トセザルベカラズト、實ニ然リ、デカルト及ビロシクベルケレーヒユーム諸氏ノ哲學モ主トシテ心理學ニ本ヅクナリ、故ニ心理學ハ哲學ノ本源ナリト謂フモ不可ナルヿ無カルベシ、

第五節　哲學ノ効用ニ就テハ、今更喋々スルニ及バザレドモ、然レドモ亦之ヲ言ハザレバ、諸君ノ希望ヲ厚ウスル能ハザルヲ以テ、極々簡短ニ之ヲ述ベントス、第一、哲學ハ之ヲ學ブ者ヲシテ能ク其心意ヲ發達スルヲ得セシム、夫レ世ニ於テ最モ貴キ者ハ何ヅヤ人ナリ人ニ於テ最モ貴キ者

ハ何ゾヤ心意ナリ然ラバ心意ヲ發達スルノ學豈貴カラズヤ、第二、哲學ハ前ニ論ジタルガ如ク、諸學ヲ統合スルノ學ニシテ、諸學ノ資給スル材料ヲ集メ、以テ概括スル所アラントス、是レ實ニ他ノ諸學ノ爲ス能ハザル所ナリ、他ノ諸學中若シ之ヲ爲ス者アラバ、是レ亦哲學ト稱スベキナリ、故ニ哲學ハ他ノ諸學ノ爲ス能ハザル所ヲ爲スモノナリ、且ツ夫レ哲學ハ心理倫理政理法理等ノ諸學ノ基礎ナリ、故ニ哲學上ノ疑問ヲ解釋シ得ルニアラザレバ、是等ノ諸學ハ確乎タル基礎ヲ有ストイフベカラズ、例ヘバ心意ノ開發スル所以、并ニ心意ト外物トノ關係、即チ二元論（エツセンシヤル、ヂューアリズム）等ヲ解釋スルニアラザレバ、心理學ノ基礎未ダ鞏固ナラズ、（前節ニ心理學ハ哲學ノ根基ナリトアレ氏、哲學亦心理學ノ根基ヲ鞏固ニスルモノト知ルベシ、）又善惡ノ標準、并ニ人生ノ目途等ヲ定ムルニアラザレバ、倫理ノ大本未ダ立タズ、政理學ニアリテモ亦同樣ノ事ニテ、如何シテ各自ニ自由ノ權アルヿヲ知ルヤ、何故不同ノ權ガ當然ナラズヤト、次第

ニ推考スルニアラザレバ、決シテ鞏固ナル基礎ヲ得ルヿ能ハズ、然レモ總テ是等ノ事ヲ爲スニハ必ズ哲學ノ範圍ニ入ラザルヲ得ズ、故ニ哲學ハ是等諸學ノ基礎タルヲ知ルベシ、

實ニ時ノ古今ヲ問ハズ、洋ノ東西ヲ論ゼズ、千古ニ卓絶セル學士ニシテ、哲學者タラザル者殆ンド稀ナリ、即チ希臘ノソクラチースプレートアリストートル諸氏ノ如キ、佛ノデカルトコントノ諸氏ノ如キ、英ノベーコンニユートンロックヒユームミルスペンセル諸氏ノ如キ、獨逸ノカントフヒテセリングヘーゲル諸氏ノ如キ、皆曠世ノ人物ナリ、若シ泰西ノ歴史ニ就テ哲學者ノ名ヲ抹殺セバ、泰西ノ人物ハ、其大半ヲ減ゼントス、東洋ニアリテモ亦然リ、孔丘老聃釋迦等ノ如キ哲學者アリテ、大ニ其榮光ヲ增スニ似タリ、然ラバ今日哲學ヲ興スノ無用ニアラザルヲ知ル、因テ予ハ今ヨリ諸君ト共ニ是等先輩ノ蹤ヲ追テソノ淵源ニ溯ボラントス、

## 第二回

### 哲學史ノ區分

第六節　予ヤ今ヨリ西洋哲學ノ沿革ヲ述ベ、以テ古來ノ哲學家ガ天地ノ幽奥ニ就テ如何ホド推究シ得タルカヲ知ラシメントス、然ルニ先ヅ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ講ズベキヤヲ略論セントス、蓋シ西洋哲學ハ希臘ヲ始メトス、而シテ或ハ希臘哲學ハ印度ニ本ヅクト云フ者アレバ、西洋哲學ヲ講ズルニハ、先ヅ印度哲學ヨリ始ムベキニ似タリ、然レドモ印度哲學ノ如キハ、全ク東洋哲學ノ部分ニ屬セル者ユエ、今姑ク之ヲ置キ、希臘哲學ヨリ始メントス、抑希臘哲學ハテールス氏ヨリ始マリ、ソクラチース氏ニ興リ、アリストートル氏ニ至リテ極レリ、故ニ希臘哲學ヲ分テ三期トシ、テールス氏ヨリソクラチース氏ニ至ルマデヲ第一期トシ、ソクラチース氏ヨリアリストートル氏ニ至ルマデヲ第二期トシ、アリストートル氏ヨリ中世ニ至ルマデヲ第三期トス、中世ノ哲學ハ真誠ノ哲學ト同一視スベカラズ、然レドモ亦思辨ノ類ナルヲ以テ之ヲ第四期トシ、此ヨリ以後ヲ第五期トス、即チ近世哲學ノ時代ナリ、

## 第一期

### テールス氏及ビ其學徒

第七節　希臘ノ哲學ハミレトスノテールス氏ヨリ始マル、テールス氏ノ事ハ得テ詳ニシ難シト雖モ、大略紀元前六百年頃ノ人ナリ、原トフヒニシヤノ豪家ニ出テ、其國ノ政治ニハ頗ル與リテ力アリト云フ、或ハ又氏ハ常ニ沈思冥想シテ政治ナドニハ全ク關係セザリキト云フモノアリ、然レ氏是等ノ事ハ姑ク之ヲ置キ、抑宇宙ノ解釋ヲ試ミシハ、氏ヲ以テ嚆矢トス、氏以為ク萬物ノ本源ハ水ナリ、萬物ハ水ヨリ生ジテ又水トナルト、始メテ之ヲ聞クモノ誰カ其淺薄ナルヲ嗤ハザラン、然レ氏當時ニアリテハ、此説モ太ダ新奇ナリシナラン、何トナレバ、當時ノ人ハ皆先祖傳來ノ神學ヲ妄信シテ、毫モ自ラ推究スルヿ能ハザリケレバナリ、思フニ、テールス氏ノ如キハ、非常ノ人物ニシテ、非常ノ變化ヲ誘起セシ人ナリ、實ニ西洋哲學ハテールス氏ノ始メテ宇宙ノ解釋ヲ試ミシヨリ時代ヲ經テ漸々開進シ、遂ニ社會一般ニ至大ナル影響ヲ及ボスニ至レリ、然ラ

バ醫家ノ神農氏ヲ崇敬スト同ジク、吾輩ハテールス氏ヲ崇敬スベキナリ、

第八節　却説テールス氏ガ何故水ヲ以テ萬物ノ本トセシカヲ考フルニ、初メ宇宙ノ成立スル所以ヲ推究シテ謂ク、理一（ウオン、プリンシプル）之レガ本源ニシテ、分殊（スペシヤル、エキジステンス）即チ森羅萬象ハ理一ヨリ派生セル者ナリ、而シテ夫ノ榮枯、盛衰、生滅等ノ如キ不斷ノ變化ハ蓋シ理一ノ種々ニ發表スルニ由テ起ルナリ、直ニ此變化ヲ以テ理一ト見做スベカラズ、然ラバ變化セザル理一、即チ萬物ノ本源ハ如何ナルモノナルヤト、此ノ如キ疑問ヲ起シ來リシハ、抑哲學ノ端緒ヲ開キシ始メナリ、テールス氏ノ時ニ至ルマデ世人皆此宇宙間ニ出デ來テ、此宇宙ノ何タルカヲ問ハズ、唯先祖傳來ノ説話ヲ信ズルノミナリキ、然ルニテールス氏其間ニ崛起シテ以為ク、萬物ノ本源ニ就テハ、實ニ至大ノ疑問アリ、豈之ヲ解釋セズシテ可ナランヤト、乃チ仰觀俯察シ、濕氣ハ遍ク有形ニ賦シテ、ソレヲ發生スルノ要素タルヿヲ思ヒ、始メテ水即チ本源タル

「ヲ考出セシナリ、
然レモテールス氏ハ書ヲ著ハサヾリシヲ以テ
詳細ナル「ハ得テ知ルベカラズシユウェグレル
氏曰ク、或ハ氏ハ萬有精神(ウオールド、ソール)ノ觀
念ヲ有セシト云ヒ、或ハ精神不滅(イムモルタリ
チー、オフ、ソール)ノ説ヲ述ベシ抔ト云ヘド、是等
ハ後世ノ人ノ臆測ニ出デシ「ナラント、蓋シ然
ルナラン、但氏ヲ以テ七賢人中ニ入ルヽハ、誰レ
モ認可スル所ナルガ、若シ果シテ之ガ真誠ナル
ナラバ、亦テールス氏ノ德望アリシ「ヲ想見ス



ルニ足ルナリ、抑、七賢人トハピヤス及ビビタコ
スソロンクレオミニースミソンチロンノ六人
ニテールス氏ヲ加ヘテ七賢人トス、皆當時德行
ヲ以テ顯ハレタル人ナレモテールス氏ヲ以テ
七賢人中第一ノ智者トスルモノ往々コレアリ」

第九節　アナキシマンダー氏モミレトスノ人
ナリ、古來氏ヲ以テ或ハテールス氏ノ徒弟ナリ
トシ、或ハ唯同時ノ人ナリトス、而シテ又或ハ氏
ハ當時學藝(殊ニ數學)ヲ以テ世ニ顯ハレ、土圭、地
圖、及ビ其他種々ノモノヲ發明セリト云フ、此等

ノ事ハ、其果シテ真ナルヤ否ヲ確知シ難シト雖モ、但氏ノテールス氏ヲ祖述セシ丁ハ、疑ヲ容ルベカラズ、氏亦萬物ノ本源ヲ推究シテ以為ク、有限ノ物象ヲ制スルモノハ、無限ナラザルベカラズ、然ラバ無限ハ萬物ノ由テ發生スル所ナリト、今氏ノ意ヲ取テ之ヲ考フルニ、無限トハ全ク老子ノ無名ヲ以テ天地ノ始メトスルト同ジク、萬物ノ未ダ分化セザル混沌タル元始ヲ指スナリ、猶ホ又之ヲ彼ノテールス氏ノ説ニ比シテ考フルニ、テールス氏ハ客觀（オブゼクト）ニ注意シ、水ヲ以テ萬物ノ本源トセリ、是レ全ク具体的（コンクリート）ノ思想ナリ、然ルニアナキシマンダー氏ハ性、數學ヲ好ミシ故カ、オノヅカラ無形ノ理ニ注意シ、遂ニ有限ノ有形ヲ離レ、無形ノ無限ヲ以テ萬物ノ本源トスルニ至レリ、是レ即チ抽象的（アブスツラクト）ノ思想ナリ、故ニ希臘哲學ハアナキシマンダー氏ヨリシテ始メテ抽象的トナレリ、語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ、形而下ヨリ形而上ニ向ヒシハ、氏ヲ以テ率先トナスナリ、

第十節　アナキシマンダー氏ノ徒弟アナキシ

ミニース氏モ亦ミレトスノ人ナリ、其學稍テールス氏ノ主義ニ近シト雖モ、然レドモ其萬物ノ本源トスル所ハテールス氏ト大ニ異ナリ、蓋シアナキシミニース氏以為ク、水ノ如キ有形物ハ恐クハ元行ニアラザラン、現ニ自己ノ身ニ就テ之ヲ察スルニ、此ノ如キ有形物ノ外、別ニ一層高等ニシテ得テ知ルベカラザルモノアリ、是レ他ナシ、生命ナリ、此生命ヤ呼吸ノ作用ニ由テ保續スルヲ得、然ラバ生命即チ空氣ナリ、而シテ我ガ身中ニ存スル生命ハ、我ガ体外ニアル空氣ト同一ナルベシ、委シク之ヲ言ヘバ、生命ハ空氣ノ一部分ニシテ、空氣ハ生命ノ集合ニ外ナラズ、即チ宇宙ノ間一大生命アリテ、各生命ハ其一部分ヲ得、而シテ風、雲、水、火、土、石ノ類ハ皆空氣ノ凝結セルト稀薄ナルトニ由テ生ズ、然ラバ空氣コソ萬物ノ本源ナレト、此ニ由テ之ヲ觀レバ、アナキシミニース氏ハ宇宙ヲ以テ一箇ノ有機体ト見做セシヿ明ナリ、

今茲ニ右三氏ノ相紹デ推究セシ所ヲ略言スレバ、初メテ萬物ノ本源ハ、果シテ何物ナルヤヲ討

尋シ、次デ此本源ハ最モ勢力アリテ最モ遍布セルモノタルヿヲ覺知シ、終ニ萬物ハ此本源ヨリ如何シテ分生スルヤノ點マデ論及セリ、凡ソ此等ノ事ハ、今ヨリ之ヲ觀レバ、格別奇異ナルヿモナケレ氏、當時草昧ノ世ニアリテハ、實ニ非常ノ發明ナリシヿト思ハルヽナリ、

## 第三回

### 第三期

#### ピサゴラス學派

第十一節　此學派ハテールス氏ノ學派ト稍其傾向ヲ異ニス、テールス氏ノ學派ハ水、空氣等ノ如キ形而下ノ物質ヲ以テ萬物ノ本源トナセリ、獨リアナキシマンダー氏ハ頗ル形而上ノ思辨ヲナセシト雖モ、能ク之ヲ考フレバ、コレトテモ全ク觀念上ノ事トハ云ヒ難シ、即チ其イハユル萬物ハ具体的ノモノニシテ、又其イハユル無限ハ全ク理想ニアラズ、又表識（シムボル）ニアラズ、但、現在ノ事實トシテ論ズルナリ、且ツ無限ヲ以テ靈知アルモノトハセザルナリ、然ルニピサゴラス氏ノ學派ハ物質ヲ離レテ抽象的ノ工夫ヲ

ナシ、數理ヲ以テ推究スルヿヲ務メタリ、

第十二節　ピサゴラス氏ハサモスノ人ナリ、大約紀元前五百四十年ヨリ五百年ノ間ニ出デ、殆ンド孔子ト其時代ヲ同ウス、然レ𪜈ピサゴラス氏ノ事ニ就テハ、古來奇異ナル説話アリテ信ズベカラザルヿ多シ、或ハ氏ヲ以テホルミース（神名）ノ子ナリト云ヒ、或ハアポロ（神名）ノ子ナリト云ヒ、或ハ一言ヲ以テ能ク熊ヲ制セシト云ヒ、或ハ處々ニ於テ同日同時ニ講義セシト云ヒ、或ハ河ヲ渡ル𪜈、河伯、氏ヲ敬セシト云フガ如キ、是レナリ、或ハ又甚シク氏ノ藝能ヲ過言スルモノアレ𪜈、其數學ニ精シカリシヿハ眞誠ナルベシ、又氏ハ晩年ニ至リテクロトナニ居リ、同志ノモノト共ニ一社ヲ結ビ、親睦ヲ厚ウシ、身ヲ脩メ行ヲ正ウセリト云フ、

リユウ（ナ）ス氏以為ク、或ハピサゴラス氏ハ埃及ニ至リ、其國ノ僧ヨリ傳受セシヿアリト云フモノアレ𪜈、是レ亦信ズベカラズ、何ントナレバ、埃及ノ僧ハ其鍾愛スル所ノ人ニスラ容易ニ其教旨ヲ聞カセザリシホドナレバ、異邦ノ人ニシテ且

ツ異教ヲ信ズル人抔ニハ固ヨリ教授セザリシト信ズレバナリト、其レ或ハ然ラン、然レ𪜈唯、其旅行セシト云フノミハ、虚妄ナラザルベシ、又ピサゴラス氏ノ自ラ哲學者ト呼ビシフニ就テ奇話アリ、嘗テペロポン子ソスト云ヘル處ニアリシニレオンシオス氏如何ナル術アリヤト問ヒシニ、答ヘテ曰ク、余ハ術アルニアラズ、余ハ哲學者ナリトレオンシオス氏哲學者ト云ヘル語ノ耳アタラシキヲ以テ復タ其意義ヲ問ヒシニ、ピサゴラス氏顔色ヲ變ジ、儼然トシテ答ヘテ



曰ク、人生ハ猶ホオリムピック遊戯ノゴトシ、此遊戯ニハ、名譽ヲ求ムルモノアリ、利益ヲ圖ルモノアリ、然ルニ更ニ此二者ヨリ高貴ナル者アリテ名譽モ利益モ欲セズ、唯其驚クベキ景況ヲ見ルヲ以テ樂ミトス、吾曹モ亦天國ヨリ降リテ此地ニ來ルモノナリ、然ルニ此地ハ名譽ヤ利益ノ為メニ奔走スルモノト集會ナリ、其中僅カノ人ハ貪惏虚誇ノ風ヲ賤視シテ、唯自然ノ理ヲ推究ス、是レ即チ我ガイハユル哲學者ナリ、彼ノ劇場ニ於テ自己ノ利名ヲ圖ラザルフノ最モ高貴ナル

ガ如ク、我ガ一生ニ於テモ自然ノ理ヲ尋究スルハ、他ノ職業ヲナスヨリ遙ニ高貴ナリト、是レ「フロソフ」即チ哲學者ナル語ノ濫觴ニシテ、後世「フロソフ」即チ哲學ト云フモ、此ニ本ク「第一節ニ述ベタルガ如シ、

第十三節　ピサゴラス氏ノ哲學ハ數理ニ基テ立テタルモノナル「ハ、既ニ第十一節ニ述ベタルガ如クナレ氏、氏ハ元來其教ヲ秘密ニシテ、遂ニ之ヲ書ニ筆セザリシヲ以テ、其哲學ニ就キ、後世種々ノ訛傳ヲ生ジタレバ、信ズベカラザル「モ往々コレアリ、且ツピサゴラス氏ノ哲學ト稱スルモノモ、決シテピサゴラス氏一人ニ成リシニアラズシテ、多ク其學徒フロローロスアキタスシムミヤスセビースノ諸氏ヲ經テ成リシモノナルベシ、故ニアリストートル氏モ彼ノ數學ニ基テ立テタル哲學ヲピサゴラス氏ノミニ屬セリトセズシテ、ピサゴラス學派一般ニ屬セルモノトセリ、斯樣ナル譯ユヘ、ピサゴラス氏ノ哲學ト稱スルモノニハ前後矛盾ノ「抔モアリテ、太ダ其眞意ノ存スル所ヲ、得ガタキナリ、

然レ氏茲ニ其大意ヲ述ベンニ、ピサゴラス氏ハ數ハ萬物ノ原儀ナルヿヲ教ヘシト云フ、其意蓋シ數ハ萬物ノ現存スル原因ナリト云フニアルナリ、猶ホ委シク之ヲ云ヘバ、萬物ハ數ニ因テ現存ス、苟モ數ナケレバ安ンゾ現存スルヲ得ン、又語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ、萬物ハ數ノ寫影ノミ、數即チ萬物ノ本源ナリ、アナキシマンダー氏ガ萬物ノ本源ハ變化ナク永在セルモノト思惟セシガ如ク、ピサゴラス氏モ亦萬化ノ中ニ永ク變化セザルモノアルヿヲ見テ、之ニ名ヲ下ダシテ數トイヒシナリ、故ニピサゴラス氏ノ意ニテハ萬物ガ如何樣ニ變化シテモ、其存在スル方法ニ至テハ、數ヲ離ルヽヿ能ハズ、而シテ數ニヨリテ萬物ハ能ク和合スルヿヲ得、故ニ數ハ萬物幷ニ萬物ノ順序ヲ確定スル大本ナリトスルナリ、是レ彼ノ周易ノ主義、數ニ本クト、其意同ジキ耶、然レ氏之ヲ要スルニ、ピサゴラス氏ノ哲學ハ極メテ不充分ナルモノニテ、之ヲ實際ニ應用セントスルトキハ、種々ノ困難ヲ生ズルナリ、ピサゴラス氏ノ物理學ニ於テハ取ルベキヿ少

シ、而シテ又其倫理學ノ如キハ、嚴肅主義（アセチシズム）ノ一方ニ傾ケリ、即チ身体ハ精神ノ獄舍ニシテ、精神ハ高尚ナル域ニ屬スルモノトシ、精神輪廻シテ動物ノ体中ニ入ルトキハ、唯其純浄ニシテ信心アル者ノミ、其苦ヲ脱スルヲ得ベシトシ、人ハ皆其身ヲ神ノ所有物トシ、萬事、神ノ意ニ順ヒ、唯、神ノ如クナランヿヲ務ムベシトスルガ如キ、一トシテ嚴肅主義ニ出デザルハナキナリ、

## エリア學派

### 第十四節　ピサゴラス氏既ニ數ヲ以テ哲學ノ主義トシ、實物ノ資質ヲ離レ、抽象的ノ思考ヲナセシガ、エリア學派ニ至リテハ、更ニ又一切ノ變化及ビ一切ノ有限并ニ特殊ノモノヲ離レテ萬古唯一元体ノ存スルアリテ轉化（ビコーミング）ハ曾テ之アルナシトシテ、此現存スル萬象ヲ一箇ノ原儀ニ復セリ、即チ是レイハユル一元論（モニズム）ナリ、然レモ遂ニ現象世界ノ成立ヲ否定スルヿモ、現象世界ノ一元体ヨリ分生スルヿモ、皆充分ニ解釋スルヿ能ハザルガ為メ、到底二元論（デユーアリズム）ヲ脱スルヿ能ハザリキ、蓋シ

エリア學派ノ主唱タルゼノフニース氏ノ學ニ於テハ、此ノ如キ不都合ハナカリシカド、パルメニディース氏之ヲ紹キゼノメリツソスノ二氏之ヲ大成セントスルニ及デ、反テ其不充分ナルヿヲ表ハセシナリ、

第十五節　ゼノフニース氏ハ紀元前六百九十年ノ頃ニ小亞細亞ノコロフォント云ヘル處ニ生レシ人ナリ、晩年ニ至リテエリアト云ヘル處ニ移住セシヲ以テ其學派ヲエリア學派ト稱スルナリ、氏ハ幼年ノ時ヨリ老年ニ至ルマデ常ニ詩ヲ好ミ、詩ニヨリテ哲學上ノ事ヲ論ゼシト云フ、ソレハ姑ク置キ、氏ハ哲學上ニ於テ如何ナルヿヲナセシヤ、アリストートル氏ノ言ニ據レバ、氏ハ仰デ寥廓タル大空ヲ觀テ理一即チ神ナリト呼ビシナリ、是レ此茫々タル宇宙ハ理一即チ神ノ本体ニシテ、靈智アリテ且ツ自存スルモノナリトノ意ナリ、故ニ氏ハ又世人ノ神ヲ以テ人類同樣ノ性質ヲ有スル者ノ如ク想像スルヿヲ痛ク排攘シ、神ハ變化ナク永在シテ、物トシテ見ザルナク、物トシテ聞カザルナク、物トシテ解セザ

ルナシ、而シテ又神ハ唯一ノモノナリ、多クノ神アリト云フハ理會スベカラザルコトナリトセリ、

第十六節　ゼノフハニース氏ノ徒弟パルメニディース氏モ亦ゼノフハニース氏ト同ジク詩ヲ以テ其哲學ヲ記セリ、氏ハエリア學派ノ中ニアリテハ實ニ屈強ノ人物ニシテ、古來其智ノ深キト其志ノ高尚ナルトヲ稱揚セザルモノ殆ンド稀ナリ、氏ハ存靈(ビイング)ヲ以テ總テ生死及ビ空間、時間并ニ分別、動作等ト全ク關係ナク、不死不滅ニシテ、單獨ナリ、完全ナリ、動クコトナク、限リナク、



分ツコトナク、遍在永在スルモノトシ、且ツ存靈ニ對スル思想ノ眞誠ニシテ、其他諸現象ニ對スル思想ハ皆虛妄ナリトスレドモ到底現象世界ノ存在ヲ蔑如スルコト能ハザルヲ以テ、現象世界ハ幻影ニシテ思想中ニ來ラザルモノト云ヒナガラ、猶ホ其存在ノ解釋ヲ試ミシニ、立論整ハズ、遂ニ自家撞着ヲ來タセリ、是レ其徒弟ゼノ氏ノ工夫ヲ下ダセシ所ナリ、

第十七節　ゼノ氏ハ大畧紀元前五百年ノ頃エリアニ生レシ人ニテ、ストア學派ノゼノ氏トハ

全ク別人ナリ、エリアノゼノ氏ハパルメニディース氏ノ徒弟ナリ、或ハパルメニディース氏ノ養子ナリト云フ、蓋シ氏ハ人トナリ、軒昂凌勵ニシテ、古代哲學者中ニアリテモ屈指ノ人物ナルヿ、誰モ許ス所ナリ、氏ハ公孫龍子ト同ジク、最モ辨證式（ダイアレクチックス）ヲ用ヒテ反對論者ノ謬誤ヲ摘發スルヿニ長ゼリ、是レ其祖述スル所ノパルメニディース氏ノ說ヲ辨護センガ為メニ利用セレナルベシ、而シテゼノ氏ノ哲學ハ固ヨリ理一ヲ證明スルニアレヒ、之ヲナスノ法ニ至リテハ其師ト同ジカラズ、プレート氏云ク、其師ハ理一ノ存在ヲ肯定シ、其徒弟ハ分殊ノ存在ヲ否定セリト、蓋シ然リ、ゼノ氏以為ク、若シ分殊アルナラバ、ソレハ同時ニ無限ニ小ニシテ無限ニ大ナラザルヲ得ズ、何ントナレバ、分殊ハ原一（ユニト）ノ集合ニ外ナラズ、而シテ原一ハ分ツベカラザル者トス、若シ猶ホ分ツベキ片ハ、ソレハ原一ニアラズ、故ニ物ヲ分テ遂ニ分ツベカラザルニ至ル、之ヲ原一トス、然レヒ分ツベカラザルモノハ、少シモ大サヲ有セザルナリ、少シニテモ大サヲ

有スレバ、ソレハ猶ホ分ツベキ理由アレバナリ、然レバ分殊ハ少シモ大サヲ有セザル原一ノ集合ニテ、無限ニ小ナル者ナリ、若シ又少シモ大サヲ有セザルモノヲ如何ホド集合スルモ大サナキ筈ナレバ此論非ナリト云ハヾ、原一ヲ以テ幾分カ大サヲ有スルモノトセザルヲ得ズ、然レドモ幾分カ大サヲ有スルモノナラバ、此ノ原一ト彼ノ原一トヲ分ツ所ノ原一ナカルベカラズ、然ラザレバ合一スベケレバナリ、然レドモ亦第三ノ原一ト初メノ兩箇ノ原一トヲ分ツ所ノ原一ナカルベカラズ、此ノ如ク無限ノ原一ヲ要スル片ハ、分殊ハ無限ニ大ナラザルベカラズ、然レドモ同時ニ無限ニ小ニシテ無限ニ大ナルハ、固ヨリ矛盾セルコトナリ、故ニ本來唯理一ノミアリテ、分殊ハ曾テアラザルナリ、ゼノ氏又行動ノ存在ヲ否定セリ、其論四條アリ、今其二條ヲ舉ゲンニ、第一、物ノ行動スルニハ、必ズ其行程ノ半ヲ過ギザルヲ得ズ、其半ヲ過グルニハ、又其半ノ半ヲ過ギザルヲ得ズ、此ノ如ク行程ヲ無限ニ分ツ片ハ、物ハ無限ノ行程ヲ經歷セザルベカラズ、是レ固ヨリ

能スベカラザルヿナリ、第二、アキリース氏ハ龜ヨリ速カナルヿ十倍ナリト雖モ、若シ龜ヲシテアキリース氏ヨリサキニ行動セシメバ、アキリース氏ハ遂ニ龜ニ達スル能ハザルナリ、初メアキリース氏ト龜トノ間ニ十里ノ距離アル片ニ、アキリース氏十里ヲ行ケバ、龜ハ一里ヲ行キ、アキリース氏一里ヲ行ケバ、龜ハ一里ノ十分一ヲ行ク、此ノ如クニシテ極リナキ片ハ、アキリース氏ハ遂ニ龜ニ達スル能ハザル譯ナリ、ゼノ氏ハ此ノ如キ辨論ヲナシ、行動并ニ分殊ノ存在ヲ否定シ、益〻自家撞着ノ存スル所ヲ表章セシヲ以テエリアノ哲學ハ氏ニ至テ衰滅セリ、

## 第四回

### ヘラクリトス氏

第十八節　エリア學派ノ哲學ハ、理一ト分殊トノ關係ヲ論ズルニ及デ、矛盾ヲ來タシ、遂ニ大成スルヿ能ハザリシヿ、既ニ前回ニ陳述シタルガ如シ、然ルニ當時又ヘラクリトスト云ヘル人アリテ、天地間唯轉化アルノミト云フヿヲ說キ出シ、エリア學派トハ全ク反對ノ進路ヲ取レリ、今

日ハ先ツ諸君ニ向テヘラクリトス氏ノ人トナリ、幷ニ其哲學ノ大意ヲ述ベントス、ヘラクリトス氏ハエフェソスノ人ブリソン氏ノ子ニテ、紀元前四百六十年ノ頃世ニ出デタリ、即チゼノフェニース氏ヨリ差〻後ニシテ、大抵パルメニディース氏ト同時代ナリ、晩年山中ニ隱遁シテ沈思冥想セリ、而シテ常ニ悲哀ノ狀アリシヲ以テ、世稱シテ悲哀哲家（ウヰーピング、フェロソフ）トイヘリ、又其言ノ幽奥深邃ニシテ了解シ難キヲ以テ、不明氏（ゼ、オブスキユーア）ノ稱アリ、嘗テペルシヤノ王ダリオスノ聘ヲ辭シテ曰ク、衆人皆真理正義ノ存スル所ヲ離レ、徒ニ貪惏ノ情ヲ恣ニシ、徒ニ虛誇ノ望ヲ抱キ、蠢愚ニシテ頑陋ナリ、嗟予レ怨恨ヲ知ラズ、又他人ノ怨恨ヲ招クヿモナク、而シテ廟堂ノ浮華ハ、最モ嫌忌スル所ナリ、予レ決シテペルシヤノ土地ヲ蹈マズ、予レハ寒微ヲ以テ足レリトシ、已ノ欲スル所ニ從ハントスルモノナリト、此ニ由テ略〻氏ノ性質ヲ知ルニ足ルナリ、然レモ氏ハ蓋シソクラチース氏以前ニアリテハ、最モ深識ノ人タリシヿ疑ヲ容ルベカラズ、聞ク

其說載セテ天理篇(オシ、子チユール)トイヘル書中ニアリト、然レドモ該書世ニ傳ハラズ、僅ニ殘缺アルヨシナレドモ、ソレモ余輩ハ未ダ覽ルヲ得ズ、但哲學史ノ類ニヨリ氏ノ哲學ノ一斑ヲ知ルノミ、

第十九節　蓋シヘラクリトス氏以爲ク、凡ソ覆載間ニ存在スル物ハ、永世流行シテ暫クモ停マルコトナキナリ、然ルニ其流行セザルガ如ク見ユルハ、唯我レノ迷ニ過ギザルナリ、今夫レ身、同一ノ川ニ入ルト雖モ、其實同一ノ川ニ入ルニアラザルナリ、何故ナレバ、川ノ水タル、同時ニ流出流入シテ、暫クモ同一ノ狀態ヲ有セザルヲ以テ、一人ニシテ再ビ同一ノ川ニ入ルヲ得ザレバナリト、又以爲ク、一物ノ來ラザルナク、一物ノ去ラザルナク、一物ノ離レザルナク、一物ノ合セザルナク、一物ノ生セザルナク、一物ノ死セザルナク、如何ナル處ニ於テモ、如何ナル時ニアリテモ、始終變遷シテ極リアラザルナリト、其意蓋シ關尹子ガ「爪之生、髮之長、榮衛之行、無頃刻止、衆人皆見之于著、不能見之于微」(關尹子七釜篇)ト云フニ同ジ

キナリ、壺丘子（列子ノ師）モ亦「凡所見亦恒見其變」（列子仲尼篇）トイヘリ、張湛ガ注ニ「苟無變停之處、則今之所見常非向之所見」トアリ、莊子モ亦「若人之形者、萬化而未始有極也」（莊子大宗師）ト云ヘリ、其意亦ヘラクリトス氏ト異ナラザルニ似タリ、猶ホ又委シクヘラクリトス氏ノ意ヲ取リテ之ヲ考フルニ、氏ノイハユル轉化ハ二種ノ相反セル作用ニヨリテ行ハルトモノニテ、實ニ爭賽ハ萬物ノ母トイフベク、而シテ天地ハ夫ノ相反セル二種ノ作用ノ和合ニヨリテ成立スルヲ得ル



ナリ、ヘラクリトス氏ノ此考ハ支那人ノイハユル陰陽ノ說ト甚ダ相類似ス、思フニ天地ノ間ニ千種萬般ノ變化ハアレドモ、少シク觀察ヲ下ダセバ、陰陽トモイフベキ二種ノ相反セル作用ヲ見出ダスコ難カラズ、近クハセリング氏抔モヘラクリトス氏ト殆ンド同樣ノ考ヲナセシガ、又ソレノミナラズ、數理家ノイハユル正負、物理家ノイハユル消極積極、論理家ノイハユル正面反面抔モ、皆同一ノ理ヲ色々ニ稱呼スルニアラザルカト疑フナリ、

猶ホ又ヘラクリトス氏ノイハユル轉化ハ何ニ由テ起ルカト問フニ、氏ハ世界ヲ永世消滅セザル火ナリトシ、又其火タルヤ或ハ消エナントスレドモ、忽チ復タ焚ヘ上リ、始終轉變シテ極リナシ、是レ卽チ相反セル二種ノ作用ナリ、而シテ夫ノ空氣、水、土ノ如キハ火ノ其烈ナル勢ヲ減少スルニ隨テ生ズルナリトセリ、故ニアリストートル氏以爲ク、テールス氏ガ水ヲ以テ萬物ノ本源トシ、アナキシミニース氏ガ空氣ヲ以テ萬物ノ本源トセシト同ジクヘラクリトス氏ハ火ヲ以テ萬物ノ本源トセリト、是レ太ダ然ルガ如シト雖モ、ヘラクリトス氏ハ火ヲ以テ轉化ヲ生ズルモノトスルニ過ギズシテ、萬物ヲ以テ火ヨリ生ズトハセザルニ似タリ、

ヘラクリトス氏ノ考ニテハ、前ニモ言ヒシ如ク、世界ハ火ニ由テ成立スルモノナルガ、遂ニハ火ノ勢熾盛ニナリ、世界ハ復タ全ク火トナリ、ソレヨリ更ニ新世界ヲ現出スベシ、又人々ニ就テ之ヲ言ヘバ、火ハソレヲシテ行動セシムルモノニテ、活動力ノ素ナリ、而ノ精神ハ火ノ揮發セルモ

ノニテ、肉体ハ其勢減シテ凝聚セルナリ、リユウ氏以為ク、後世イハユル唯心論（アイデアリズム）ハパルメニデース氏ニ始リ、唯物論（マテリアリズム）ハヘラクリトス氏ニ始マルト、實ニヘラクリトス氏ノ言、方今ノ唯物論者ノ言ト符合スルモノアルガ如シ、

第二十節　ヘラクリトス氏ノ主義ハエリア學派ノ主義ト全ク相反スルモノニテ、ヘラクリトス氏ハ始終唯轉化ノミアリテ、永世存在スルモノハコレナシトシ、パルメニデース氏ハ物ノ變遷ハ幻影ニシテ、畢竟變遷ハコレナキナリトス、即チ一ハ轉化ナキガ如ク見ユルハ自己ノ迷ナリトシ、一ハ轉化アルガ如ク見ユルハ自己ノ迷ナリトス、乃チ其學ノ全ク相背馳スルヲ知ルベシ、然ルニエムペドクリース氏并ニ原子論者（アトミスツ）等起リテ此兩派ノ主義ヲ調停センヿヲ務メタリ、

エムペドクリース氏

第二十一節　エムペドクリース氏ハアグリゼントムト云ヘル處ノ富家ニ生レ、大約紀元前四

百四十年ノ頃世ニ出デシ人ニテ、其父メートン氏ト同ジク民政黨トナリテ頗ル著名ナリキト云フ、氏ハ又廣ク四方ニ漫遊シテ奇話珍説ヲ蓄藏シ、既ニ哲學者ナル上ニ政治家、演説家、物理家、醫者、幷ニ詩人ノ性質ヲモ兼有シ、且ツ魔法ニモ錬熟セリ、又アリストートル氏ハゼノ氏ヲ以テ辨證式ノ鼻祖トセシ如ク、エムペドクリース氏ヲ以テ修辭學（レトリツク）ノ鼻祖トセリ、此ニ由テ之ヲ觀レバ、氏ノ多能ナリシヿ辨ヲ俟タズシテ明ナリ、其他氏ノ事ニ就テハ種々ノ訛傳アリ



テ容易ニ信ズベカラザルヿ抔モ往々コレアリ、或ハ氏ハ風雨ヲ制スルノ力ヲ有セシト云ヒ、或ハ氏ノオリッピック遊戯場ニ入ルヤ、衆人皆氏ニ注目セリト云ヒ、或ハ氏ハ自ラ神ト稱シ、婦女子ノ輩、氏ヲ拜セシト云フ、然レドモ是等ノヿハ深ク信ズルニ足ラザルナリ、通常氏ニ就テヨクイフ話アリ、是レ他ナシ、氏ノ死ニ瀕スルヤ、自ラ火山ノ噴火口ニ投入シ、以テ世人ヲシテ益自己ノ神ナルヿヲ知ラシメントセシモ、何ゾ圖ラン、氏ノ隻履、噴火ノ為ニ飛ビ出タルガ故ニ氏ノ秘策ハ忽

チ露顯セリトノ話ナリ、

第二十二節　エムペドクリース氏ノ哲學ハ理一分殊ノ如何樣ニシテ和合セルヤヲ說クヿヲ主トス、即チエリア學派ノ存靈トヘラクリトス氏ノ轉化トヲ調停セント企圖スルモノナリ、然ルニエムペドクリース氏ハソレヲナスニ當テ以爲ク、宇宙間ニ四箇ノ元行アリ、是レ他ナシ、水、火、土、及ビ空氣ナリ、此四箇ノ元行ハ、本來唯一箇ノモノニテ、神聖ナル溟涬世界中ニアリテ親和ノ爲メニ和合セリ、然ルニ抗爭ノ漸發生スルニ

及デ、遂ニ本來ノ和合ヲ破壞シ變化多キ世界ヲ現出スルニ至レリト、其考甚ダ奇異ナルガ如シト雖モ、イハユル四箇ノ元行ハ、支那人說ク所ノ五行ト、最モ相類似スルカト思フナリ、

却說エムペドクリース氏ノ說ニテハ、宇宙間ノ種々ノ轉化ハ、唯四箇ノ元行ガ種々ニ其位置ヲ變ズルヨリ起ル、而シテ四箇ノ元行ニ於テ到底變更ナキモノナレバ、其意太ダエリア學派ニ近シ、然ルニエムペドクリース氏ハ又四箇ノ元行ノ外ニ使動ノ勢力アリ、此勢力ヤ和親ト抗爭ト

ノ二性ヲ具ス、而シテ彼ノ四箇ノ元行ヲシテ種種ニ其位置ヲ變ゼシムトス、然レバ亦轉化ナシトイフニハアラズ、即チ兩派ノ哲學ヲ調停スルモノナリ、而シテ氏ノイハユル使動ノ勢力ハヘラクリトス氏ノ轉化ニ淵源シ、氏ノイハユル溟涬世界ハエリア學派ノ存靈ニ胚胎ス、故ニ古來氏ヲ以テ折衷學派（エクレクチック）トスルモ、其謂レナキニアラザルナリ、

第五回

原子論者

第二十三節　原子論者タルリユーシツポスデモクリトスノ二氏モエムペドクリース氏ト同ジクエリア學派トヘラクリトス氏トヲ調停セントヲ企圖セシト雖モ、其方法ニ至リテハ全ク之ト異ナリデモクリトス氏ハ前ニモ言ヒシ如ク嘻笑哲家ト呼バレシ人ニテ紀元前四百六十年ノ頃希臘ノ殖民地ナルアブデラト云ヘル處ノ富家ニ生レ、長ズルニ及デ遍ク四方ニ漫遊シ、後故郷ニ歸リ、書ヲ著ハシテ其蓄藏セル知識ヲ廣ク傳播セリ、氏嘗テ謂ヘルアリ、曰ク、余ヤ今世

ニアリテハ寂モ廣ク且ツ寂モ遠ク遊歷シ、最モ經驗シタル人ニモ、最モ智識アル人ニモ接セリト、氏ハ旅行ノ爲メヨホド貨財ヲ費ヤセシト見ユレ𪜈、然レ𪜈其カハリニ蓄藏シタル智識ノ多寡ニ至リテハ之ニ及ブ者殆ンド稀ナリ、實ニアリストートル氏ヨリ以前ニアリテハデモクリトス氏ホド學問該博ノ人ハナカリキトナリ、氏ハ又九十歳(或ハ百有餘歳ト云フ)ノ高齡ニ達シ、平穩ナル生命ヲ送リシト云フ、リユーシッポス氏ノ事ハ得テ詳ニシ難シト雖モ、デモクリトス氏ヨリ差長老ノ人ニテ又デモクリトス氏ホドノ碩學ニハアラザリシナルベシト思ハルヽナリ、

第二十四節　原子論者ハエムペドクリース氏ノ如ク性質ノ異ナル元行アリトハセズ、性質ノ同ジキ原子アリテ萬物ハ此原子ヨリ成ルヿヲ論ゼリ、此レ原子論者ノ稱アル所以ナリ、抑原子論者ノ說ニテハ原子ハ唯其大サ、重サ、并ニ形狀ヲ異ニスルヿハアレ𪜈性質ハ皆同ジクシテ物ノ成分タルモノナリ、而シテ幾分カ大サヲ有ス

ルモノナレ𪜈、分ツベキモノニアラズ、又自ラ變化スルモノニアラズ、乃チ現象世界ニ種々ノ狀態ヲ生ズルハ此原子ノ種々ノ形狀、秩序、并ニ位置ヲ有スルニ由ルナリ、

原子論者又オモヘラク、原子ハ單一ニシテ且ツ不壞性ノモノナレバ、互ニ相分レ相離ルヽモノナラザルヲ得ズ、果シテ然ラバ原子ヲシテ相分レ相離レシムル所ノモノナカルベカラズ、是レ他ナシ虛空ナリ、虛空ノ各原子間ニアルヲ以テ各原子ハ相分レ相離ルヽヲ得ルナリ、之ヲ要スルニ、虛空ト塡塞トハ共ニ物ノ原儀ニシテ、天地ノ成立ニ必須ノモノナリト、然ルニ原子論者モエムペドクリトス氏ト同ジク行動ノ緣起スル所以ヲ推究シ來リテ如何シテ此原子ハ此ノ如ク種々ノ結合ヲナシ、有機無機ノ世界ヲ現出シ得ルヤト疑ヒ、遂ニ原子ノ本質ニ於テ之ヲ見出ダセリ、夫レ原子ハ其重サヲ異ニスルヲ以テ虛空中ニ浮動シテ互ニ衝突シ、隨テ又益廣大ナル行動ヲ生ジ、同形ノ原子他ノ同形ノ原子ト結合ス、然レ𪜈原子ハ其本性ニヨリテ復タ分離ス、是

ヲ以テ、之レガ為メニ種々ノ狀態ヲ現出スルニ至ルモノトセリ、

斯樣ニ原子論者ハ天地萬物ヲ虛空塡塞ノ二原儀ニ復セリ、然ルニ塡塞ハ即チ原子ヲイフナレバ、我ガ身体モ精神モ皆原子ヨリ成立ス、而シテ感覺モ亦原子ニ由リテ生ズル者ナリ、但シ精神ヲ構造スル原子ハ火ヲ構造スル原子ト同ジク純淨ニシテ圓形ノモノナリ、此ノ如キ原子ハ全身ニ遍布スレドモ、各其局部ニ隨テ其官能ヲ異ニセリ、例ヘバ腦髓ハ思想ヲ生ジ、心臟ハ忿怒ヲ生



ジ、肝臟ハ願望ヲ生ズルガ如シ、又空中ニ存スル精神的ノ原子ハ呼吸ノ作用ニヨリテ、體中ニ入ル、而シテ生命ハ呼吸ノ繼續スル限リハ絶エザルナリ、又感覺ノ如キハ外界ノ原子ガ流入シテ我ガ覺官ヲ衝動スルニ由リテ生ズルナリトセリ、

デモクリトス氏ノ說ハイハユル唯物論ナリ、故ニ後世ノ唯物論者中ニモ往々氏ヲ祖述スルモノアリ、然レドモ氏ハ肉樂抔ヲ尚ブモノニハアラズ、精神ヲ以テ人ノ最モ高貴ナル部分トシ、精神

ノ善ヲ欲スルモノハ、最モ神聖ナルモノヲ欲スルモノトシ、之ニ反シテ、身體ノ善ヲ欲スルモノハ唯、人間ノ善ニ止マルモノナリトス、又最上至極ノ善ハ快樂ニ外ナラズ、然ルニ此ノ如キ快樂ハ唯、精神上ニ存スルナリトス、乃チデモクリトス氏ハ快樂主義ヲ首唱スルモノナルヲ知ルベシ、思フニ、シレネイク學派エピキユロス學派及ビ今日ノ實利學派抔ハ皆デモクリトス氏ニ淵源スルモノニテ、今之ヲ唯物論者ト總稱ス、又原子ノ說ハ諸君モ知ラルヽ如ク、近世化學者ノ中ニ再起セリ、當紀ノ初年ニ際シダルトン氏原子論ヲ唱ヘ、原子ハ一定ノ重量ヲ有スルモノニシテ、和合ハ其互ニ接近スルヨリ生ズトセリ、ソレヨリウヲラストン及ビトーマス、トムソンノ二氏ハ、ダルトン氏ノ原子論ヲ採用シ、且ツ之ヲ世ニ廣メタリ、後ベルゼリウス氏ニ至テ、從前ノ原子論ヲ釐正スル所アリト云フ、然ルニ其論本トデモクリトス氏ニ出ヅ、乃チデモクリトス氏ハ化學ニ効アルヿ、亦淺尠ナラザルヲ知ルナリ

第二十五節　今又茲ニ原子論者ノ希臘哲學上

ニ關係アル所ヲ述ベントス、既ニ前ニモ論ゼシ如ク、エリヤ學派ハ唯、理一アリテ分殊ハ之アラズトシ、ヘラクリトス氏ハ唯、分殊アリテ理一ハ之ナシトス、然ルニ原子論者ハ、彼ノ二學派ヲ折衷シ、理一ト分殊ト共ニ之アリトス、即チ單獨ナル原子ハ理一ニシテ其種々ニ集合セルハ分殊ナリ、コノ故ニ彼ノ二學派ヲ折衷スルヿハエムペドクリース氏ト異ナラザレ𪜈、固ヨリ其方法ニ至テハ、大ニ異ナルモノアリト知ルベシ、且ツ夫レ原子論者ハ、原子ヲ分ツベカラザルモノトスレ𪜈、少シニテモ大サヲ有スルモノガ分ツベカラザル理由ハ之ナク、又大サヲ有セザルモノナレバ、ツレヲ如何ホド集合スルモ、大サヲ有スルノ理由ナキヿナレバ、原子論ハ固ヨリ未ダ充分ナルモノニハアラザルナリ、

## アナキサゴラス氏

第二十六節　アナキサゴラス氏ハ、紀元前五百年ノ頃、リヂヤノクラゾメニート云ヘル處ニ生レシ人ニテ、多ク先祖ノ遺傳ヲ受ケタレ𪜈、パルメニディース氏抔ト同ジク人間ノ榮華ハ毫モ企

圖セズ、大望心ヲ全ク哲學上ニ存シ、二十歳ノ頃ヨリシテ、哲學ヲ修メ、當時ノ碩學ヲモ賤視スル風アリキ、後アゼンスニ移リ久シク滞在セシカド、不信神ノモノナリトノ惡評ヲ受ケシヲ以テ、復タラムプサコスト云ヘル處ニ移リ、大ニ人ニ尊敬セラレ、七十二歳ニシテ死セリトナリ、夫ノアゼンスハ、ソレヨリ後太ダ隆盛ナリシ處ナルガ、ソコニ哲學ヲ傳播セシハ、アナキサゴラス氏ノ力ニヨレリ、殊ニ氏ハ、ペリクリースユリピデトス并ニ其他有名ノ人ニ接セシコトナレバ、其當時ニ影響ヲ及ボセシコトハ、少カラザリシナルベシ、

第二十七節　アナキサゴラス氏モエムペドクリースデモクリトス諸氏ノ如ク理（一分殊ノ説ヲ調停センコトヲ務メタリ、其言ニ云ク、希臘人ハ原造及ビ消滅アリト假定ス、是レ全ク謬誤ナリ、何トナレバ一物ノ生ジ來ル者ナク、一物ノ消失スルナク、但、太初ヨリ存スル物象ノ種々ニ分合スルアルノミ、故ニ當ニ混合ト鎔解トノ二作用アリト云フベキナリト、其意太ダ勢力保存（ペル

ジスタンス、オフ、フオールス）ノ説ニ近シ、然レ𪜈氏ノ理一分殊ヲ論スル所ニ至テ最モ奇ナリ、氏オモヘラク太初ヨリ「ホミオメリー」ト云ヘル原質アリ此原質ノ數固ヨリ無量ニシテ萬物ヲ構造スル所ノ成分アリ、然ルニ此原質ハ如何シテ行動ヲ生ジ來リシヤト問ヘバ、アナキザゴラス氏ハ天地ヲ造成スル所ノ萬有睿智（ヌース）アリテ此原質ヲ行動セシメ其意匠ヲ遂ゲントスルナリト、蓋シ萬有睿智ハ至純至淨ニシテ、如何ナル處ニモ存在シ、自ラハ行動セザレ𪜈、總テ行動

ノ原因タルモノニテ、即チ理一ナリ、而シテ行動ヲナス所ノ原質ハ分殊ナリ、乃チアナキサゴラス氏ノ哲學ハ矢張理一分殊ノ互ニ如何樣ノ關係ヲ有スルモノナルヤヲ説明スルヲ主トスルモノト知ルベキナリ、

希臘哲學ノ第一期ハアキサゴラス氏ニ至テ終ルナリ、何故ナレバ、氏ハソレヨリ以前ノ諸氏ノ哲學ヲ合一スレバナリ、アナキサゴラス氏ニツイデプロトゴラスゴルヂヤスプロヂコスヒツピヤス等ノ諸氏、事々物々、疑ヲ懷キ、問ヲ設ケ、好

デ辨ヲナシ、索隱行怪ト評シテモ不適當ニアラザル樣ナル狀態ヲ呈出スルニ至レリ、世之ヲ詭辨家（ソフヒスツ）ト稱ス、有名ナルソクラチース氏乃チ此ノ時ニ起リテ天下ヲ風靡シ、希臘ノ哲學更ニ其面目ヲ改ムト云フ、

西洋哲學講義巻之一　終

明治十六年四月二十七日版權免許

講述并出版人　福岡縣平民　井上哲次郎　東京麹町區富士見町五町目六番地

發兌人　東京府平民　阪上半七　東京日本橋區呉服町十二番地

# 弘通書肆

大坂　梅原龜七
同　岡島真七
西京　村上勘兵衛
同　大黒屋太郎右衛門
名護屋　片野東四郎
東京　北畠茂兵衛
同　稲田佐兵衛
同　丸家善七
同　吉川半七
同　文盛堂清造